

日本記者クラブ会報

第470号
2009年
(平成21年)
4月10日発行

〒100-0001
東京都千代田区幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

新年度予算マイナス3・13%に

先月の総会で新年度の予算が決定した。一般会計の規模は約4億300万で、前年度に比べ1、400万減でマイナス3・13%になった。現行の会費に改定(2000・4)して以来、最大の落ち込みになった。ちなみにこの8年間の平均減少率は0・8%だった(予算書18ページ参照)。

大きな原因が3つある。1つは新聞、通信、放送各社の退会と会費引き受け口数の減少だ。そのため法人会費が約420万円減っている。

プレスセンターに移転(1976・9)して、現在の会員・会費制度がスタートした。その際に各社はそれぞれの法人会費の引き受け口数を決めている。社勢、社格に応じて、最低1口から最高16口以上まで6段階の傾斜負担方式で、法人会費が決まった。その後は入会打診の段階であらじめ引き受け口数を決めてから、正式申請をもらっている。現在の法人会費は月額約4万5千円

なので、各社は、年額最低で50万から最高900万強を引き受けていることになる。

この会費がクラブ財政の基幹的な部分になっている。また、1口について各社から2人の基本会員(編集・報道幹部など)を登録してもらい、基本会員が役員の被選任権や個人会員の推薦権を持ち、クラブ運営に当たっている。プレス各社が財政の基本的部分を担保し、編集・報道幹部が運営に責任を持つ形なのだ。その基本構造に一部だが、揺らぎの兆しが生じている。

2つ目は法人賛助会員の問題だ。ニュースソースたり得る一部上場企業や新聞、放送関連企業の退会で、約320万円減少した。

以上2つは、いまの厳しい経済不況の反映でもあるが、事務局としてはそもそも日本記者クラブの存在意義が問われていると真摯に受け止めて、対応を考えていきたいと思っている。

3つ目は、事業収入が約420万減少している点だ。これは会員の食堂、会議室、宴会場などの利用が減っていることによる。施設の利用は900人強のOBの方々(個人D会員)が主体だが、ここでも退会が増え、入会が減っているうえ高齢化が進んでいる。それが事業収入減少の主な要因とみている。ジャーナリズムの連帯のためにも、早い機会に個人D会員は首都圏だけでなく、地方会員社のOBの方々にも仲間になってももらえるような制度上の工夫が必要だろう。

それはともかく、ホテルなどに比べるとクラブの料金は格安なので、今後は各社の行事、会議などにもっと利用してもらうよう働きかけなければならぬ。

新事務局長に中井良則氏

戦後の民主主義と経済成長の中で、日の当たる坂道を駆け上ってきた、この国のジャーナリズムがいま試練のときを迎えている。外的環境

や条件に頼るのでなく、より自覚的にジャーナリストが自分たちの力でここを乗り越えて、その使命を果たすことが期待されていると考える。クラブの会員・会費制度も新聞、放送の全盛期につくられた。「ジャーナリズムの根本は一步も譲れないが、存在意義の再確認とそれを支える制度の見直しを検討する準備が必要だろう」。滝鼻卓雄理事長は予算を決めた総会で、こう述べた。

そういう時期だけに、理事会が4月1日付で、前毎日新聞論説副委員長・中井良則(なかい・よしのり)さんの新事務局長任命を承認したのは、ありがたかった。

中井さんは毎日入社後、マドリードへ語学留学、社会部、外信部を経て、ロンドン(2年)、メキシコ支局長(5年)、その後ニューヨーク支局長(3年)、北米総局長・ワシントン支局長(3年)、外信部長、編集局次長などをとめた。04年からクラブの企画委員として活躍してきたので、顔をみれば、ああ、あの人と思ひ出す会員も多いと思う。

当面、企画や会報を主にみてもらうが、来年には公益社団法人への移行をひかえているので、それにも当たってもらうことになる。

(専務理事 岩崎玄道)

● ひらめきとこだわり

倉重 篤郎 (毎日新聞論説副委員長)

3つ感じた。まずはジャーナリストのひらめきとこだわりの重要性。ニクソン辞任という歴史的ニュースに何を感じたか。直接もつと聞いてみたい。何を？辞任の本当の理由、過去の秘話などいろいろある中で、フロストの直感「彼（ニクソン）は盗聴したことを反省してない」であるなら、自らのホームグラウンドであるテレビで対決し、謝罪に追い込めないか。ひらめきは何度か現実の壁に突き当たるが、問題意識の持続力が見事結実する。

導入部はドキュメンタリー風だ。ニクソン大統領といえば、ホワイトハウスを去る際のニュース映像を思い出す。不自然なくらい両腕を上突き上げての「ダブル・ピース・サイン」。「お約束」のこのシーンがあった。それだけに終わらず、ヘリに乗り込んだ後、窓越しに暗い目で見える顔の映像に続いた。ニクソンの二面性が表現された印象的な場面だった。

「軽量級」のテレビ司会者が思いついたニクソンへの単独インタビュー

● 取材者と取材対象者の本性

布施 優子 (日本テレビメディア戦略局国際部長)

第2に政治家の評価とは何か。2つのショックで米国の対外政策を大転換した華やかな政治実績と、政敵への盗聴という汚い政治手段は、どう整理されるべきなのか。やはり、実績は手段を浄化しないのか。もうひとつはプロの芸の深さ。

ニクソンに似ても似つかない？役者さんがいつの間にかニクソン以上にニクソンに見えてきたから不思議だ。

1. 野心、カネ、様々な思惑がからみながら、取材者と取材対象の本性がさらけ出されていく。

そして、ひとつの達成感によって「ハッピーエンド」となるのだが、観る側としては、自分自身が過去に体験したインタビュー取材と、その反省や後悔が次々と思いつき出され、やや苦い気分が残った。



フロスト×ニクソン

この映画だった。実話に基づくサスペンスと、真実を追い求める若手記者の気迫。政権側の

こたえられなく面白かった。秀逸である。とりわけ脚本がいい。

フロストとニクソンの「テレビ決闘」は、もう伝説だから、映画も陳腐だろうと思っていた。それが大間違い。心理サスペンスの連続で、息をのむ。ニクソン役のフランク・ランジェラが実にうまい。感想2点。活字では、この動画描

● 素顔と虚栄、メディアの野心

大西 隆雄 (北海道新聞論説副主幹)

あれはもう30年以上も前のこと。若き日のロバート・レッドフォードとダスティン・ホフマンがワシントン・ポスト紙の記者を演じ、ニクソン大統領を追いつめていく。

「大統領の陰謀」というタイトル

ディープスロートとの息詰まる駆け引きに、胸をわくわくさせたのを覚えている。

本作「フロスト×ニクソン」の舞台はテレビであり、その追及劇も元大統領とテレビ司会者のトーク・バトル。2本の映画は時代性も手法も異なるが、米国の最高権力者とメディアの対決というストーリーの組み立ては同根のものだ。

繰り返しハリウッドの素材となる政治家ニクソンの素顔と虚栄。メディアの野心。興味尽きない一作だ。

● アメリカという場の力

浅井 泰範 (朝日新聞出身)

写は、不可能とはいわぬまでも、難しい。元新聞記者は羨む。いまひとつは、アメリカそのものの力。私は、外報部長をしていたころ、アメリカに赴任する特派員に「麻雀でいえば、場に3翻ついている。書けば即満貫で、大きく掲載される。だが、それは、アメリカという場の力であることを忘れるな」と、よく言った。

非アメリカ人、フロストの挑戦の動機も、このアメリカの場の力だ。この映画も、その力の産物である。

タクシー・トウ・ザ・
ダークサイド

9・11テロ以後、対テロ戦争にのめり込んだブッシュ前米政権は、拘束した「敵性戦闘員」に対する拷問、虐待などの非人道的行為を組織的に拡大していった。この作品はその犯罪性をアフガニスタン

のバگرام空軍基地拘禁施設、イラクのアブグレイブ刑務所、キューバのグアンタナモ収容所の現場から鋭く問い返し、戦時権力の乱用に走ったブッシュ政権上層部こそ米軍の捕虜虐待を促した元凶であると告発している。

観客はまず、バگرام基地で2002年末に起きたタクシー運転手拷問死事件の現場に導かれる。拷問死の事実をスクープしたニューヨークタイムズ紙の女性特派員や被害者の肉親、尋問にかかわった米兵士らの証言映像を基に事件の真相に肉迫していくアレックス・ギブニー監督の手法は執拗かつ精確だ。

拷問、虐待はバグラムにとどまらず、グアンタナモ、アブグレイブに



暴かれる衝撃的な実態

またがるジュネーブ協定違反の広範なシステムと化していた。水攻め、睡眠阻止、性的虐待など違法な尋問手段を容認していたブッシュ政権上層部。その衝撃的な実態が多くの映像資料によって暴かれていく。

なかでも象徴的なのは、「テロに対処するため闇の部分(dark side)

の任務を遂行し、……いかなる手段も使わざるを得ない」とテレビ報道番組で言い放つ Cheney(副大統領)の映像カットだ。闇の拷問から生還できなかった無実のタクシー運転手と、闇の戦争を正当化して恥じない権力者の対比からこの作品の題名が

生まれたのだ。

2008年度のアカデミー長編ドキュメンタリー賞に輝いたこの優れた作品を、ジャーナリズム関係者はもちろん、多くの若い人たちに観てほしいと思う。

共同通信出身

菱木 一美

写真提供 リアム・ステイ・インターナショナル・日本



ロサンゼルス・シビック・センタールの一角に、ロス疑惑で有名になった LAPD(市警本部)がある。そこから東に伸びる東一番街が、通称 J タウン(日本人街)だ。

タウンの真ん中に高野山別院があり、宮武写真館はそのかたわらにあった。香川県出身のカメラマン宮武東洋(1895年—1979年)が築いた日系人の心の拠点である。2世、3世までの日系人の生活様式は米本土やハワイでも日本と同様だった。お正月、ひな祭り、夏祭り(盆ダンス)、2世ウイークと、宮武氏は年中、働いた。いまはもうなくなったが、1960年代に「東京会館」という日本レストランがあった。子息のアーチー氏に仕事を譲った宮武氏は、夕方そ

日系人の苦悩、生きる努力

このバーで静かに過ごしていた。「ひどい時代でした。パールハーバーが攻撃されたあと、日本軍が本土に攻めてくる。その時、日系人は立ち上がるかもしれない」といったデマが拡がり、私たちは、日系人保護の名目で、マンザナに送られたのです——日系米人の収容施設カリフォルニアの砂漠の中のキャンプ、マンザナ収容所で長い歳月を過ごした体験を宮武氏はそう語ってくれた。

当時、語学研修をかねて本社から同地に派遣されていた私は、こうした不思議な体験をした人々と接触したのだった。私が仕事を手伝った日系紙「新日米」の社長、城戸三郎氏は、JACL(全米日系市民協会)の初代会長だったが、日系人が米軍に加わり忠誠心を示す、という方向を打ち出したため、日本派の人々に襲われ、重傷を負った体験をポツリポツリと語ってくれた。

宮武氏も城戸氏も別世界に旅立ったが、宮武氏の遺したフィルムは、当時の日系人の苦悩と生きる努力を雄弁に物語っている。

産経新聞出身

阿部 穆

東洋宮武が覗いた時代

©Toyo's Camera Film Partners

たかなし
あきら
高梨 昌

元雇用審議会会長

3・2(月) シリーズ研究会「雇用問題」
② 司会 川戸恵子委員 出席 75人

▼派遣法の原点に返れ



「赤ん坊のときはおとなしかったけど今はモンスタ―」。労働者派遣法をこう例える識者がいる。1985年の同法制定に深く携わった「ミスター派遣法」ですら、同じ憂いを抱いていることが研究会を通じてよく分かった。

規制緩和の流れで同法の改正(悪)が重ねられた結果、派遣労働者が「雇用の調整弁」になり、不安定労働者を「物品」扱いで「売り買い」する派遣元と派遣先の法令軽視の姿勢が「モンスタ―」ぶりを助長してきた。特に、技能教育がおざなりのまま、未熟練労働者が軽作業や製造業に派遣される実態を、氏は忤怛たる思いを込め「手抜き工事と一緒に」と嘆いた。

「派遣を(通訳などの)専門職に限定し、一種の職業別労働市場をつ

くりたかった」。これが、そもそも派遣法の精神と力説。年功序列、終身雇用を守られない専門職の労働条件向上のための法律だったのだ。だが、生みの親の理想に反して99年、専門職限定の派遣が原則自由化された。「政」「財」に「労」も加わった規制緩和の大合唱、バブル崩壊後の失業率上昇を理由に「バンドラの箱」は開けられた。

発言の趣旨は「派遣法の原点に返れ。経過措置は必要だが99年以前に戻すべきだ」と、筆者は理解した。派遣業種を専門職に限定し、「派遣切り」が問題になった製造業派遣は完全請負化に。ワーキングプア(働く貧困層)の温床の日雇い派遣は、ほかの日雇い労働と特別法で規制する必要性も説いた。

81歳とは思えぬ、早口で淀みのない口調。「現役を退いているから発言の影響力は少ない」と、講演を締めくくったが、ゆがんだ派遣労働制度を立て直すには、労働問題に携わる政治家、官僚、そして記者も氏の発言を重く受け止めるべきだろう。

東京新聞社会部

菊谷 隆文

ひぐち
よしお
樋口 美雄

慶応大学教授

3・4(水) シリーズ研究会「雇用問題」③
司会 宮田謙一委員 出席 69人

▼製造業派遣の禁止には慎重

世界的な景気後退により、日本でも、前例のない雇用調整が行われている。派遣社員や期間従業員に対する派遣切りや雇止め止めだ。背景に何があるのか。樋口教授は興味深い図表を示しながら、働き方、働きかたの変化を分析した。

まず非正規雇用が増えた原因の変化。1997年ごろまではパート・アルバイトの増加が主因だったのに対し、98年以後は派遣や契約社員らが急増したためとみられる。つまり増え方の質に変化が表れているわけだ。過剰雇用の解消にかかる期間も、樋口教授の計算によれば、80年から97年までは2・9年だったのに対し、98年以降は2・2年と、短くなっていた。

経済界は正社員のかわりに有期労働者を雇い入れ、不況期に備えた雇用調整の仕組みを作り上げたとも受け取れる。



「97年のアジ

アの通貨危機が98年の日本の金融危機につながった。この時期を境に、日本の企業経営にパラダイムの転換があったのではないかと説いた。

①労働組合やNPO、政府などが連携して、雇い主が労働法や雇用契約を順守するよう啓発活動を強める
②トライアル雇用などで再就職の手立てを広げる
③雇用保険の適用拡大
——といった対策を提案する。「再就職させることが先決。再就職先で非正規から正社員へ転換できるような支援策を考えるべきだ」とも付け加えた。きわめて現実的だ。

ただ、最も関心の高い製造業に対する派遣の是非に関しては「単純に禁止しても偽装請負などの陰湿な方向に行くだけだ。雇用の量の拡大と質の向上は担保できないだろう」と禁止に慎重な立場を取った。ここは評価が分かれるかもしれない。

製造業派遣は麻薬に似ている。コスト削減に即効性こそあるが、技能の伝承や職場の士気に悪影響を及ぼす。使い過ぎ(中毒)に陥れば企業の健康は失われるだろう。

読売新聞社会保障部次長

左山 政樹



トケ・トゥフキア・タランギ フォーラム（PIF）議長

▼温暖化：島嶼国の危機を訴える

「太平洋の島国は地球温暖化に脆弱だ。温暖化の影響でハリケーンは年々強くなり、すでに島民の生活に影響を与えている。キリバスやツバルは水没の危険にもさらされている」

5月に北海道で開かれる「太平洋・島サミット」に先立ち、来日したタランギ議長（ニウエ首相）はこう、島嶼国が抱える問題を訴えた。

今年12月には、2013年以降のポスト京都議定書の国際的枠組みを決める気候変動枠組み条約国会議（COP15）がデンマークで開かれる。議長がこの会議に向けて求めているのは先進国の率先した温室効果ガス削減に向けた行動と、京都議定書の下、発展途上国が地球温暖化の悪影響に適応するために資金を提供する「適応基金」をもっと使いやす

太平洋諸島

3・5（木）記者会見
司会 長沢光男 委員 通
訳 池田薫 出席 35人

くしてほしい、ということだった。

日本では最近、温暖化に対して懐疑的な書物が出版されるなどしているが、島嶼国にとって温暖化による影響はまさに生命に関わる問題だ。同議長は、水位の上昇で水没の危険がある島では、オーストラリアなどへの島民の避難も含めて議論になっていることを紹介。「避難先で島民が国家主権を主張できるのかといった難しい問題もある。（先進国は）温暖化の事実を認識して、他人ごとでなく自らのこととして行動してほしい」と迫った。

日本ができることは何か。麻生太郎首相は、太平洋に浮かぶ16の国や地域で作るPIFと同じ島国である日本が、気候変動や廃棄物などの問題について同等のパートナーとして取り組む「環境共同体構想」を提案した。

観光は同地域の大きな産業だ。日本人訪問者について同議長は「現在の年間13万～15万人から50万人に増えてほしい」と語った。観光産業を守るためにも温暖化対策は欠かせない。

産経新聞社会部

杉浦 美香

益川 敏英 ノーベル物理学賞 受賞者 京都産業大学教授

3・9（月）昼食会 司会 住田良能理
事 高橋利行委員 出席 98人

▼ユーモアと気骨さと

ノーベル賞受賞を「嬉しくない」と言い切った偏屈ぶりは、この日はなりを潜めていた。聴衆をおもんばかってだろ、物理の話はほとんどなし。生い立ちをたづねり語った。



敗戦は5歳のとき。戦争中のことは「記憶のかけらもない」そうだが、スチール写真が3枚残っているという。

1枚は「親父が勤労動員されて高射砲の弾を運んでいるところ」。もう1枚は、名古屋大空襲のとき自宅の2階屋根を突き破って1階に落ちた不発弾。向こう3軒両隣は焼けたのに、益川家だけ無事だった。「そのときは怖くなかった。後で、あのときの焼夷弾が不発弾じゃなかったらとゾッとすることがあった」。もう1枚が「その後、家財道具をリヤカーに乗せ、その上に僕がチョココンと乗っている」写真。

小中学校時代は「ほとんど勉強しませんでした」。家業の砂糖問屋の

手伝いで、ザラメが1000キロ入った麻袋を担いだ。だから、懸垂の回数はクラスで一番、高校の時は片手懸垂もできた。

1955年に「名大の坂田昌一博士が画期的理論を作る」というニュースを知って科学に憧れたというのには有名な話。跡を継ぐよう迫った父親の反対を振り切り、一度だけの約束で名大を受験、見事に合格する。

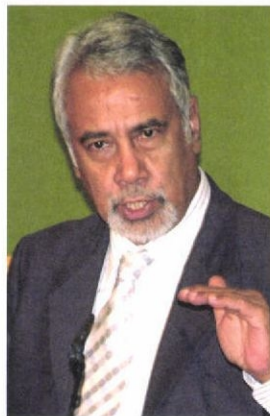
大学では、「ちよつと背伸びをして」友人たちと議論に明け暮れた。大学院に入り、いつとき脳の研究に惹かれたが、結局、坂田研究室に。当時、素粒子論は混沌の時代。「世界中の大御所が新理論を追求した。我が国で湯川さんがやらないわけがない。湯川さんは素領域とか何とか言っただけ、これは間違っていた」。最後にさらりと湯川秀樹博士の間違いに触れ、「大御所何するものぞ」という気骨を見せた。先輩にも容赦ないのが物理学者なのだ。

朝日新聞科学エディター

高橋真理子

カイ・ララ・シヤナナ・グスマン 東ティモール首相

3・10(火) 記者会見 司会 中井良則
委員 通訳 長井鞠子 出席 45人



▼インフラ整備の重要性を強調

グスマン首相の気さくな人柄のためだろう。記者会見の会場はたびたび笑いの渦に包まれ、和やかな雰囲気となった。

記者会見でグスマン氏は、インフラ整備の重要性を繰り返し強調した。東ティモールは2002年にインドネシアから独立した後も、政治が不安定な状況が続き、経済は低迷。グスマン氏は、港湾や空港、電力事情などの整備の遅れを見て投資を控えた海外資本があったとして、今後、戦略的な開発計画を確立、インフラ整備などをその中核に据える考えを示した。海外からの投資を呼び込むことで雇用の場の拡大につなげたい狙いがある。

また、グスマン氏は人材育成が重要との認識も示した。若年層への教

育を充実させることや、スキルの向上を目指すという。

記者会見には、ダコスタ外相やピレス財務相ら共に来日した閣僚らも出席した。「われわれはチームですから」とグスマン首相。質問が、多言語国家の抱える問題点や世界的な金融危機の影響など専門分野に及ぶと、閣僚らが答える場面もあった。

東ティモールでは公用語のポルトガル語とテトゥン語のほか、インドネシア語など30以上の言語が話されており、多言語の問題が指摘されてきたが、「チーム」のダコスタ外相は「言語はもはや問題ではない」と述べ、海外留学の経験がある若者が増えてきたことを挙げて、外国語を教える研究機関を創設することを明らかにした。

グスマン氏は1980年代前半からゲリラの司令官を務め、92年に治安当局に逮捕された後、99年まで獄中で過ごした独立闘争の英雄だが、終始穏やかな口調でユーモアを織り交ぜながらゆつくりと話す姿が印象的だった。

共同通信外信部

本間 麻衣

なかやま 中山 俊宏 としひろ 津田塾大学准教授

3・16(月) シリーズ研究会「オバマのアメリカ」⑤ 司会 高畑昭男
委員 出席 77人

▼ブレアに近いオバマ外交

1月20日の就任以来、大型景気対策法の成立やイラク駐留米軍の撤退方針を矢継ぎ早に打ち出し「猛烈なスピード」(CBSテレビ)でブッシュ前政権からの政策転換を図るオバマ大統領。人気は依然衰えず、日本でもさまざまなレベルで「オバマ研究」が盛んだ。

オバマ氏は、尊敬するリンカーンやケネディという偉大な先輩たちを意識した演説や手法で、よく両者と比較される。では指導者としての発想は実際、誰に似ているのか。中山氏は当クラブの「オバマ研」で「トニー・ブレア(前英首相)の外交思想に極めて近い」と指摘した。

ブレア氏は首相だった1999年4月、米シカゴで行った外交演説で、世界には国家の主権にさえぎられて放置されたままの問題が多いが、相互依存が進む時代では国境を越えて対応しなければならぬ責任が国際社会にあると訴えた。

オバマ氏も、相互依存性の密度が高くなった世界において米国が果たすべき役割を強調している。中山氏

は「外交ではブレア・ドクトリンの理念を引き継ぐとしているのではない」と語る。

イラク戦争では、積極参戦し結果的に任期途中での首相退陣に追い込まれたブレア氏と違い、オバマ氏は戦争反対の立場を貫いた。だが反戦主義者というわけではなく、テロとの戦いの主戦場と位置付けるアフガニ



スタンは部隊増派を決めている。だが、タリバン復活のアフガン問題をどうやって乗り切るのか。アフガンは「オバマのベトナム」(米誌ニューズウィーク)になるのではないかとの声も出始めている。

英労働党改革と経済再建を実行したブレア氏。変革を掲げ、米国の再生と責任を訴えるオバマ氏。ブレア氏はイラクでつまづいた。オバマ大統領が理念通りに外交を推進できるのか、ウオッチしたい。

共同通信編集局次長 近藤 順夫

やまざき
山崎 拓 与党アフガニスタン
復興調査団長

3・18(水) 記者会見 司会
田崎史郎委員 出席 81人



▼農業インフラ整備の支援に期待が

対テロ戦の最前線アフガニスタン。オバマ政権が優先課題に掲げるその安定化に、日本はどう対応するのか。与党調査団長として3月に現地入りした自民党の山崎外交調査会長は、「アフガン復興」と「日米同盟維持」の2つの視点で考える必要を示した。

カルザイ大統領らと会談した山崎氏は、8月にある大統領選の円滑実施や警察強化などに日本政府が約3億ドルを追加支援することを伝え、今後の支援策についても話し合った。復興支援策では、選挙監視委員の派遣と農業開発が浮上しているという。山崎氏は、具体的には灌漑や農業インフラの整備を挙げ、大統領自身からも「日本の指導的立場」に期待が寄せられたと明かす。

その実現にはNGOの協力が不可欠だ。しかし「ベシャワール会」の伊藤和也さんが昨年夏、武装グループに殺害されたばかり。ただ同会には、03年から長さ約20キロの灌漑用水路を建設してきた実績がある。山崎氏は「危険を伴うが、思い切った担当する以外にないんじゃないか」と意気込みをみせた。

より難しいのは、米軍やNATOが主導する対テロ戦への協力だ。

治安悪化は著しく、カブールでさえ移動に装甲車を要し、ISAF(国際治安支援部隊)本部では毎日のように兵士の死を悼む参加諸国の半旗を目にしたという。

ブッシュ前政権は自衛隊の空輸支援などを打診したが、政府は「軍事的な支援は難しい」と見送った経緯がある。今回の訪問先でも「できないと明確に申しあげた」ものの、「それではなかなか国際社会から理解を得にくい」ことも痛感した。

軍事協力にも踏み込むのかどうか。「オバマ政権はどんな要請を行ってくるのか」と苦悩をにじませたが、具体的な言及はなかった。

朝日新聞編集委員 谷田 邦一

レザー・アスラン
カリフォルニア大学助教

3・19(木) 研究会「亡命イラン人のイスラム論」 司会 脇祐三委員 出席 40人

▼急速に進むイスラムの個人化

「中東研究会」と「著者と語る」を兼ねた1時間40分だった。ゲストのアスラン氏は1972年、テヘラン生まれ。イラン革命で家族とともに故国を去り、米国で育った。内側と外側の双方の視点からイスラム世界を語る気鋭の論客だ。約1400年前の勃興期から9・11後までの変遷を描いた著作の邦訳『変わるイスラム』も刊行されたばかりである。

中東政治論の論旨は明快だ。「過激なイデオロギーの勢力も政治に参加することで穏健になり得る」「デモクラシーの基礎は世俗主義ではなく多元主義であるべきだ」「イスラム勢力の政治参加こそ地域の安定に重要」。パレスチナのハマスやレバノンのヒズボラを、脅威と見なして排斥してきた、米国の中東外交への痛烈な皮肉だろう。



イラン革命30年への評価も辛い。「中東の中では比較的公正な選挙をしてきた

が、選挙を経ない影の政府が実権を握る悲しきデモクラシーだ」と言う。そして、「米国のイラン孤立化政策が結果的にウラマー(イスラム法学者)による専制の構造を支えた」と付け加えた。

そのイランにも変化が起き、識字率は女性でも9割に達する。識字率上昇とインターネットの浸透は、イスラム世界全体を変えつつある。「かつて若者は最寄りのモスクの指導者にイスラム法の解釈と行動の是非を尋ねたが、今ではサイバースペースに流布する多様なファトワー(宗教的判断)の中から自分にフィットする解釈を選ぶようになった」からだ。

ウラマーによる解釈の独占が崩れ、イスラムが急速に個人化していることが重要な変化だとアスラン氏は力説する。既存の宗教権威が崩れ、神学校出身でないウサマ・ビンラーディンまで自らファトワーを発表し、一部で強い支持を得ている。

こうした変化をイスラムに訪れた宗教改革の一断面と位置付ける解説には、斬新な響きがあった。

日本経済新聞論説副委員長

脇 祐三

なかがわ

秀直 ひでなお

自民党元幹事長

3・25(水) 昼食会 司会 今井環副理事長
倉重篤郎委員 出席 128人

▼麻生首相で5月解散・総選挙

「埋蔵金」を掘り当てたせいか、麻生太郎首相と距離を置いている実力者が、自民党がやや形勢を盛り返している段階で、どう動くかに関心があるせいか、現役の記者を含めて多くの取材陣が集まった。

スピーチの大半を、持論の「政治と官僚とのかかわり」について費やし、政局については①5月ごろに国民の審判を仰ぎ、政局の硬直を打破すべきだ②選挙に勝てそうもないからカオスを代えるという議論には組まない——と、あからさまな批判を避け、麻生首相の下で衆院選に臨む考えを明らかにしたにとどまった。

半面、郵政民営化がなし崩しになっ
ていてという危機意識があるのだ
ろう、「小泉改革」が問われている

ことについて「いま起きていることの諸悪の根源が小泉改革なのか」景気悪化は小泉改革のせいだなどという人は少ない」と、穏やかな調子ながら反論してみせた。

注目されたのは「新しいリーダーシップ論」で、いまのような「変化の時代」には、「正三角形」「ピラミッド型」のリーダーシップではなく、現場で、変化に対応し、新たなチャレンジをしている若い人々を、下から「逆三角形」で補完、ネットワークするリーダーシップが正しいのではないか——という点である。

「俺が、俺が」という古典的なリーダーシップを否定したことは、奥ゆかしくもあるが、危機意識の薄い「平時」のリーダーシップ論にも聞こえた。求められているのは「有事」もしくは「非常時」のリーダーではないか。単騎で駆け抜けた小泉純一郎氏に私淑している中川氏に期待されている役割とは、いささか異なるような気がした。世を忍ぶ仮の姿に納得しまい。政治不信の高まりに込める本音を聞きたい思いが残った。

読売新聞出身

高橋 利行

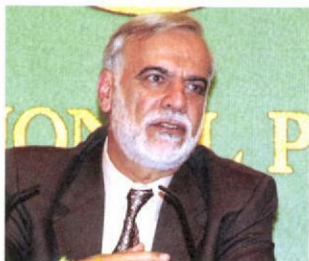
ガーンニム・アルワン・アル・ジュマイリ 駐日イラク大使

3・25(水) 記者会見 司会 中井康朗
委員 通訳 池田薫 出席 35人

▼国交70年 交流を深化させたい

イラクとの国交が70年前(1939年)に始まったとは、浅学にして大使の会見まで知らなかった。発掘調査など、彼の国とは石油の輸入だけではない幅広く深く付き合っていたことに改めて気付かされた。

それが、イラクのクウェート侵攻(90年)とそれに続く湾岸戦争で断絶したのは記憶に新しい。大使が、日本の経済制裁履行に触れ「問い合わせに応じられない」とイラク側に返信するだけでも制裁違反になるかもとしていた」と述べたのは、あまりにも忠実に制裁を守った我が国へのささやかな皮肉だったか。



言葉通り、英語を解する中流階級の人々も多く、美味なイラク料理を楽しむ機会が多か

った。ただ人々は度重なるテロや治安を回復できない米軍にいらだち、苦悩していた。

03年8月、自爆テロに襲われた直後の宗教都市・ナジャフを訪れた際には、無残に破壊されたモスクを黙々と片づける数千の人々の視線を一身に浴びた。彼らは怒りの声をあげるでもなく、その場で唯一の異邦人である私をただじっと見つめていた。その姿が、深い悲しみを雄弁に物語っていた。復興に向けて苦闘するイラクに関する報道に接するたびに、彼らの視線がよみがえる。

大使は「イラクの若者たちに日本の文化・社会に触れてもらって交流を深めてもらいたい」とも語った。陸上自衛隊が進出した南部バスラで取材した時のこと。サッカー好きの高校生、アッバス君に「ナカタ(中田英寿選手)を知ってるか」と話しかけられて仲良くなり、私は日本のサッカー雑誌とボールを贈った。彼は今も元気に球を蹴っているだろうか。大使の話聞きながら、アッバス君の顔が浮かんだ。

毎日新聞政治部副部長

山科 武司

古賀 伸明 連合事務局長



▼パラダイムの転換が必要

「話が何となくひとごとのように聞こえます」。連合の古賀伸明事務局長に、少々きつい感想が会員から出た。仕事と生活の調和を意味するワーク・ライフ・バランスの重要性を古賀氏がこう強調したときだ。

「サービスをよくするのはいいが、働く人はどうなるのか。宅配便は配達時間まで指定する必要があるのか。コンビニエンスストアは24時間開いていなければならぬのか。真の豊かさとは何か、社会の仕組みから考え直すべきだろう」

これに対して「問題があるなら、働いている人がひどい声を上げなくては駄目なのでは」というのが会員からの意見である。労働組合は評論家ではないからだ。

古賀氏は「新自由主義があおった金融の膨張や、市場に任せればよい

3・27(金) シリーズ研究会「雇用問題」④
司会 菅沼堅吉委員 出席 51人

という市場原理主義の暴走が、現在の分配のひずみや雇用悪化をもたらした」とみる。「価値観、パラダイムの転換がぜひ必要だ」という。

連合が実際にしていることは何か。政府に雇用対策の推進を求めたり、日本経団連や厚生労働省と政策をすり合わせたりすることである。

仕事を分かち合う「日本型ワークシェアリング」での政労使合意が成果として挙げられるが、実態は既存の雇用調整助成金の拡充である。

「ワークシェアを理由に、労働条件の引き下げは受け入れられない」というものの、「個々の労使が合意したものは尊重する」という。実質的に賃金カットを伴う動きがすでに起っている。非正社員のための政策も掲げているが、「雇用の原則は期間の定めのない直接雇用（つまり正社員）」との認識である。

労働界で力があるのは個別企業の労組で、連合はそれに乗るいわば業界団体のようなものである。労働組合の構造上、古賀氏の話が総論的なものは仕方がないのだろう。

日本経済新聞特別編集委員兼論説委員
森 一夫

オサマ・サラヤ エジプト・アル・アハラム紙編集長

▼際限なき民主化は過激派政権を

アル・アハラム紙は日本の新聞とは異質なメディアである。1952年エジプト革命で誕生し、現在も続く(世俗的なアラブ民族主義)政権の支柱のひとつであり、その編集長は、現政権を代表する国家的イデオログである……。

会の冒頭、筆者(司会者)がアハラム紙と同紙編集長のステータスについて、こんな紹介をすると、オサマ編集長は早速訂正・反論した。

オサマ編集長は、筆者の紹介は、前世紀半ばナセル大統領の側近ハイカル氏が編集長を務めていたころの古いアハラム観とばつさり。現在の同紙は政府(政権)から独立した存在であり、報道の自由の下で政府批判も行っていると語った。

さらにムバラク現政府との具体的な関係については「政府が考えていることを一般



大衆に伝え、一般大衆の声を政府に伝える」新聞であり、西側世界

3・27(金) 開会 司会 藤原和彦
通訳 新谷恵司 出席 25人

の新聞と異質ではない旨、強調した。さて、オサマ編集長がスピーチで力説したことのひとつに「際限のない民主化はイスラム(過激)主義政権の誕生を招く」との政治認識、あるいは西側向け警告がある。

この認識は、西側、とりわけ米国の民主化圧力に抵抗する中東各国政権の論拠になっており、半面で、イスラム主義勢力にとどまらず、政府批判勢力を抑圧する各国政権の言い訳になっている。

オサマ編集長はまず「ヒトラー(の政権)は民主選挙によって選ばれた」と指摘。そのうえで、「イスラム過激勢力は民主選挙でいったん政権を握れば、二度と手放さない。さらに同政権がもたらす災難は、世俗的な独裁政権の災難をはるかに上回る」旨、警告した。

このほか、エジプトのアブデルナセル駐日大使が参加されたことを付記したい。また、オサマ編集長のスピーチが精力的だっただけに、『イラク再生』(03年刊)の著書もあるアラビスト、新谷恵司さんの卓越した通訳に感謝したい。

読売新聞出身 藤原 和彦

米ホワイトハウス

オバマとメディアの微妙な関係

▼大越 健介

(NHK)

待っているのだ。

3月某日。ホワイトハウス南庭に
しつらえた演壇の前に、多くのメデ
ィアを従え、経済政策を語るオバマ
大統領がいた。そのわずか数十メー
トルには、海兵隊のヘリコプター「マ
リーン・ワン」が、轟々たるエンジン
音を響かせている。会見の後すぐ
に遊説先へと飛び立つ主人の出発を



「経済政策」会見にカメラの放列
(ホワイトハウス南庭で 筆者撮影)

時あたかも、公的管理下にある保
険グループ・AIGの法外なボーナ
ス支給問題が露見、バッシングの渦
中にあつた。いきおい、大統領への
質問にもトゲが混じる。対するオバ
マは「怒りはごもつとも。私も同じ」
とひとしきり憤慨してみせると、「サ
ンキュー、ガイズ」と身を翻した。
振り向きもせずヘリに向かう。ど
こか白々とした空気。

ハネムーンは終わったが：

米メディアが最近、伝えるところ
によると、オバマのハネムーンは終
わつたのだそう。メディアや議会
との関係は、もはや甘いものではな
いという。

1週間後、夜のゴールデンタイム

を狙つた会見が行われた。経済困難
に直面する国民に、大統領自ら忍耐
を求める狙いである。記者の質問は
これまでになく手厳しい。「AIG
のボーナス問題を早くから知ってい
たくせに白々しい」などなど。答え
に満足できないと、より辛らつた言
葉で二の矢の質問を放つ。

しかし、「厳しくなつたメディア」
のはずなのに、ハネムーン気分が浮
かれたような原稿は依然多い。先日
のニューヨーク・タイムズは、政権
内部の人物の取るに足らない言動
(首席補佐官のエマニエルがスー
パーマーケット内のATMで現金を
引き落とすのを見た、等々)が、い
ちいち記事になる現状を嘆いて見せ
た。一方で、オバマの頭髪に白髪が
増えた(ように見える)という記事
を一面に持つてきた同紙の報道姿勢
を、自虐的に紹介しながら：

結果、急ぐ報道に自戒も

むやみに結果を急ぐ報道が多いと
の批判も聞かれる。とりわけ24時間
のニュース・チャンネルは、「伝え
続けなければならない」宿命から、
先へ先へと進みたがる。みずからC
NNにコーナーを持つジャーナリス
トのハワード・カーツは、「未曾有
の経済危機を引き継いだオバマに

は、1年は猶予を与えるべき。政権
50日で通信簿をつけるのは行き過
ぎ」とオバマに同情する。

メディアは、オバマとの距離を測
りかねているように見える。それば
かりか国民との距離も。世論調査で
の大統領支持率は、依然60%台と堅
調だ。先を急いでオバマ批判に走り
出したのはいいが、国民が今もオバ
マに寄り添っていることに気づい
て、はたと立ち止まる。オバマとそ
の周囲の人々を、ハリウッドのセレ
ブのように持ち上げて見せるのも、
微調整の意識が働くからか。

一国民に戻つたメディアの人間
は、普通にオバマ・ファンだつたり
する。

ヘリの騒音に悩まされた過日の記
者会見。「ひどい条件だよ」とボヤ
いていたある記者は、会見が終わる
と、オバマとマリリン・ワンの写
り込みの場面が珍しいのか、大急ぎ
で記念写真に収まっていた。そのほ
かにも、互いにカメラを向け合う姿
があちこちに。

かく言う私も、そのうちのひとり
であつたことは言うまでもない。

おおし・けんすけ 1985年入局 政
治部与党キャップなどを経て 2007年
からワシントン支局長

大阪 橋下流改革

府庁舎移転案否決で初の挫折

▼田井東 一宏

(産経新聞社)

「もうノーサイドー」

3月24日午前4時ごろ、大阪府の橋下徹知事の声が、大阪府庁の廊下に響き渡った。

橋下知事が「人、モノ、金」を動かすにはこれしかない」と打ち出した、大阪・南港にある経営難に陥っていた大阪市の第3セクター「大阪ワールドトレードセンタービルディング」(WTC)への府庁舎の移転条例案が、府議会で否決された後の会見での言葉だ。

強気発言はカラ元気？

橋下知事は昨年2月、「大阪府は破産会社。職員のみなさんはほとと一緒に死んでください」との刺激的なフレーズを放ち、府政運営に乗り出し、これまでさまざまな橋下流改革を成し遂げ、大阪府を一躍、全国の注目する自治体に押し上げた。そんな橋下知事の、初めての挫折が、移転案の否決だった。

議会最終日の同23日。恒例となっている朝の登庁時の囲み取材。「府民感覚を感じ取れば議決は当然だ」「大阪が変化に向かうか、止まるかの一日になる」などと強気の発言を繰り返していた。

ところが、カラ元気に聞こえて仕方がなかった。というのも、知事与党である公明党府議団が、他党派が態度を決めかねている状況の同19日に早々と、移転案に反対の意向を示していたからだ。その余波を受けてか、最大党派で同じく与党の自民党府議団も22日になって賛成の意向を打ち出したものの、党議拘束を掛けることはできなかった。

府議会の勢力図は自民49、民主24、公明23、共産10、諸派6の計112。移転案の可決には出席議員の3分の2以上(全員出席の場合は75)の賛成が必要だ。

しかし、ふたを開けてみれば、賛成46票、反対65票、無効1票で、75



本会議終了後、府議会各会派にあいさつをして回る橋下徹知事＝3月24日午前3時前、大阪府庁＝産経新聞社

票どころか、過半数にも届かなかった。

1100億円にのぼる平成20年度の府の収支改善計画では、職員給与のカットや医療、福祉など府民サービスの削減まで踏み込み、府議からも疑問の声があがった。また、府内の43の市町村の首長に補助金の見直しなどへの協力を求めた際も、強烈的なバッシングにあい、涙ながらに訴えた。

得意な、対立軸、示せず

不利な局面を橋下知事は、卓越したバランス感と交渉術。そして、8割を超える圧倒的な府民の支持をバックに乗り切ってきた。

今回の移転案についても「大阪の

変化の機運は今を逃してはならない。都市構想などについて夢を語るのが政治家の務め」という知事の考え方には共感する部分もあった。

では、なぜ今回、庁舎移転に失敗したのか。

そもそも、移転構想が明らかにしたのは昨年8月。WTCの破綻処理という大阪市の事情で3月中旬の結論が必要だったとはいえ、半年あまりで府議会に結論を求めたことへの「拙速感」は否めなかった。

さらに大きかったのは、これまで使ってきた橋下流交渉術の真骨頂が出せなかったことにあると思う。橋下知事は、教育改革では「教育委員会」、国直轄事業負担金問題では「震が関」など、常にうまく敵をつくり、対立軸を示してきた。しかし、今回は明確な敵をつくることができずに、府民の関心を集めることができなかったことが痛かった、と思う。

ただ、「超前向き思考」の知事のこと。今回の失敗を糧に、次の一手を打ち出してくることは間違いない。やはり橋下知事からは目が離せない。

たいとう・かずひろ 1993年入社 大阪社会部 橋下知事が知事に就任した2008年2月から大阪府庁キャップ

「おくりびと」米アカデミー賞

観光客受け入れ急ピッチ
ロケセット再現計画も

佐々木 亨

(山形新聞社酒田支社)

山形県庄内地方を主な舞台に撮影された「おくりびと」(滝田洋二郎監督)。映画界最高の栄誉とされる米アカデミー賞受賞は、撮影を支えた県内関係者をも大いに喜ばせた。その影響は、スクリーンに映し出された各ロケ地にも波及。地図を手にした観光客が多く足を運び、一躍脚光を浴びている。メーンロケ地となった酒田市では、「おくりびと」効果で地域を活性化させようとの動きが本格化している。



納棺師事務所に設定された旧割烹小幡＝山形県酒田市

小幡」や、納棺の所作をまとめたビデオの撮影シーンを行った映画館「旧港座」などが舞台となった。現在には空き家だが往時をしのばせる料亭と、古き良き映画文化を封じ込めたまま閉鎖した映画館。

庄内ロケに協力した地元関係者は「制作サイドからロケ地として要望されたのは『古いんだが、まだ生きているような場所』だった」と苦笑する。

があるとは正直、思わなかった」と驚く。受賞後すぐ、酒田への交通手段や地元で作ったロケ地マップの入手法などに関する問い合わせが殺到した。全国各地の旅行代理店60社ほどからロケ地巡りをツアー商品とする話も持ち込まれている。

こうした「おくりびと」効果に対し、受け入れ態勢を強化しようとの動きが出始めた。3月中旬、酒田商工会議所と酒田観光物産協会が地元ホテルや旅館、タクシー会社、ガイド・ボランティアなどを対象に「ロケ地巡り受け入れ研修会」を開いた。映画に関する観光客の問い合わせに対応するため、ロケ地情報を共有するの狙い。荒生常務が講師となり、詳しいロケ地の場所、出演者やスタッフが通ったラーメン店などのエピソードを交えて紹介した。3日間の開催で約300人が研修を受けた。

ロケセットを再現しようとの計画も動きだした。舞台は旧割烹小幡。撮影を全面支援した地元の特定非営利活動法人(NPO法人)「酒田ロケーションボックス」と酒田市、観光物産協会が連携し、整備を進める方針だ。「おくりびと」の美術監督を現地に招き、ア

ドバイスを受けながら整備方針を

決めた。

ロケーションボックス副理事長の佐藤英俊さん(44)は「4月中旬か、遅くとも5月の大型連休前には、観光客の立ち入りを可能にしたい」と意気込む。また、旧港座の所有者も、映画の大ヒットに後押しされる形で映画ファンの仲間とともに上映再開を計画している。

長引く景気低迷で、全国の地方都市の活力が失われて久しい。酒田も同様。「おくりびと」効果を最大限に生かし、交流人口の増加、滞在型観光への誘導につなげる官民一体となった施策が今、強く求められている。

ささき・とおる 1998年入社 本社運動部を経て2005年から酒田支社

一口メモ 酒田ロケーションボックス

2007年12月に設立した特定非営利活動法人(NPO法人)。会社員や飲食店経営者、市議会議員など地元青年会議所時代の仲間を中心に結成した。映画やテレビ番組のロケ誘致や撮影支援などを主に行う。活動を通して、酒田の情報や魅力を発信するとともに酒田の歴史と文化を生かしたまちづくりを目指す。代表は萩原吉郎理事長。電話0234(23)2446。



私が出会った
越路吹雪リレー
エッセー⑤

1971年秋、東京・日生劇場は八愛の讃歌―エディット・ピアフの生涯Vで華やいでいた。2カ月にわたる長期リサイタルなのに、切符の入手困難がファンを嘆かせていた。

イヴ・サンローランのドレスをまとい、軽やかにステップを踏みながら聴かせるシャンソン。遠目にも、うなじから背中にかけて匂いたつ色気。肩をこきざみに波立たせる、あでやかなしぐさ。少し鼻に抜ける甘い声。ピアフでもグレコでもないコーちゃん節。

その合間をぬって、渋谷のマンションで、ついにコーちゃんに会った。秘かに見つけてきた舞台。動機不純と言われようと宿願達成。ブラボー!! 新聞記者にも、たまに余禄がある。企画にかなえば、心に思う人物に会えるのだ。

インタビュにこたえるコーちゃん。あれっ? ちよつと雰囲気違うぞ。ガウン姿で、吸入器の蒸気を吸い込んでいる。でも、話は愉快、痛快、

コーちゃんの愛の讃歌

快テンポ。

夏の盛りに毛皮のコートを着て出かける。「時候や天気より自分の気分」。了解。「150万円もする毛皮を買いながら、タクシー代が20円安かったと大喜びしている」とマネジャーをつとめ続けた岩谷時子さんの証言。

不眠症との闘い。湯船で温まり、逆立ちを試み、テレビの西部劇に目を凝らしながら、ひたすら睡魔の訪

れを待つ。パリのホテルでは真夜中の洗濯も儀式に加わった。

上がり症。初日が近づくと思夢にうなされた。化粧がはかどらない。ドレスのファスナーが上がらない。「初日。ああ怖い。手は熱くなる、顔は火照る、もう絶望的」と鼻先に皺を寄せた。

そしてガン恐怖症。両親ともにガンで亡くした。だから、起きると遺影に手を合わせ「あんたがたガンで

■西島 雄造

くブツブツ。

願いかなわず、1980年11月7日、胃ガンで親の元へ。56歳。師走の11日、青山葬儀所には3000人が、枯葉の季節にスターの死を惜しんだ。会葬御礼は1枚のレコード。いまは懐かしい45回転盤のA面は「愛の讃歌」、B面は夫の内藤法実作曲「誰もいない海」。ジャケッとは遺影と同じ写真。素敵な笑顔だった。かつて西銀座と呼ばれた街のはず

取材の思い出をお寄せください
文化・芸能担当記者でつないできたシリーズ。今号の西島会員には2度目の執筆をお願いしました。会報委員会で「私が出会った人」を拡大していきたいと思っています。文壇の大御所、あるいは演劇人や音楽家等々、いわゆる文化人や芸術家の取材上の思い出をお持ちの会員はいらっしゃいませんか? 投稿していただける方、情報をお持ちの方は事務局(長谷川・本庄 3503-2752)までご連絡ください。

れに、小さなバーがあった。和服を小粋に着こなしたママが、どことなく越路吹雪に似ていた。意識していたかどうかは知らないが、客足が静まると、しばしばコーちゃんのレコードに耳を傾けていた。告別式の夜、小さなレコード盤に針を落とし、ママと二人でしみりした夜になった。



にしじま・ゆうぞう
会員(元読売新聞
芸能部長)

会葬御礼として特別に制作されたレコード ジャケッ(写真)は篠山紀信氏が撮影したものでお気に入り一枚だった

プロヒューモ氏のけじめのつけ方

— スキャンダル失脚後の決意 —



三橋 規宏

「元英陸軍相 国家機密スキャンダル プロヒューモ氏死去」—2006年3月11日の朝日新聞に2段扱いでこんな死亡記事が載った。前日の10日、脳溢血で倒れ、ロンドン市内の病院で死去、享年91歳。

それからもう3年が過ぎたが、最近モラルなき政治家や経済人の犯罪が話題になるたびに、ジョン・プロヒューモの温和な顔を懐かしく思い出す。彼を知る大多数の人々の記憶の中では、プロヒューモといえば、英国史上最大のスキャンダルにまみれた傲慢な男としての印象が刻み込まれているだろう。しかし彼にはもう一つの別の顔があった。スキャンダルで政界を引退した後の身の処し方を通して、紳士としての名誉回復にその後の生涯をかけた男の顔である。私は、1985年3月から約3年

間ロンドンに駐在した。英国病の克服に立ち上がったサッチャー首相の号令の下、ロンドン・シティは金融ビッグバン（英証券取引所の大改革）真っ盛りの時代で、その取材に追いまくられていた。

そんなある日、「タイムズ」だったと思うが、プロヒューモの社会奉仕家としての近況を伝える小さな記事が目にとまり、おやつと思った。あのプロヒューモのことなのかと。プロヒューモ事件といえば1963年に発覚した英国最大の国家機密漏洩スキャンダルで、日本の新聞も大きく取り上げた。それからすでに50年近くの歳月が流れており、今の若者のほとんどは彼の名前さえ知らないだろう。事件の概要を簡単に振り返っておこう。プロヒューモは1915年、イタ

リア系貴族出身のアルバート・プロヒューモ男爵の子息として生まれた。パブリックスクールの名門ハロ―校を経てオックスフォード大学に学ぶ。絵に描いたようなイギリス貴族の教育を受けた後、25歳で下院議員に当選、英国史上最も若い国会議員になった。60年7月、保守党を率いるマクミラン内閣の陸軍大臣に就任、45歳の若さだった。当時、マスコミは「次期首相候補の最短距離にいる男」ともてはやし、プロヒューモは人生の絶頂期にあった。そんな時、彼は21歳になったばかりのコール・ガール、クリスチーナ・キーラー嬢と出会い、親密になる。一方、キーラー嬢は、駐英ソ連大使館付武官、エブギエーニ・イワノフ大佐とも情交を重ねていた。このことが発覚し、マスコミは「現役の陸

軍大臣がソ連武官と女性を共有すること、英国の国家機密がソ連に漏洩したのではないかと激しく追及した。

1963年3月22日、プロヒューモ陸相は議会の要請に応じ、釈明のための演説をした。

「キーラー嬢と私との交友関係にはなんらの疚しい（不道德な）ことはない」

この一言が彼の命取りになる。この段階で、マスコミや一部の野党議員の中にはすでにスキャンダルの証拠を握り、「プロヒューモは嘘つきだ」と糾弾した。

10週間後の6月4日、プロヒューモ陸相はマクミラン首相に手紙を送り、議会での偽証を全面的に認め、陸相辞任を含め一切の公職から身を引くことを伝えた。以上が英政界を揺さぶった世紀のスキャンダル、プロヒューモ事件の大筋である。

●政界引退、貧民街で奉仕活動

私が関心を引かれたのは、事件そのものではなく、事件後のプロヒューモの身の処し方、責任の取り方だった。特に閣僚といった権力の頂点に立った者が過ちを犯した後の人生の過ごし方である。

彼は政界引退後、しばらく静養と称して自宅に引きこもり、これから人生をじっくり考えた。10カ月後、プロヒューモはロンドン・イーストエンドにある貧民救済施設「トインビーホール」で働く決意をする。

イーストエンドはロンドンを代表する貧民街である。浮浪者、アルコール中毒患者、西インド諸島からの流れ者などの吹き溜まりになっていた。地理的には、チームズ川沿いのドッグランドの北側に位置し、昔からユダヤ人やユグノー教徒（フランスの新教徒）、ロシア、ポーランドなどからの亡命者の逃亡先としても知られていた。

プロヒューモにとって、イーストエンド訪問は恐らく初めてだったに違いない。金持ち貴族の子息としてエリート教育を受け、権力の中核を歩み続けた男にとって貧民街の存在など視野に入らなかったはずだ。

トインビーセンターで、彼は、台所の皿洗い、床掃除から人生のやり直しを始めた。呑んだくれのアル中患者の世話も厭わなかった。陸軍大臣という権力の頂点を極めた人間にとって、これはきわめて苦しいつらい体験だったに違いない。しかし彼は黙々とそれに耐えた。

なぜ、彼はこのような選択をした

のだろうか。この点について、彼はかたくなに説明を拒んでいる。

●ノブレス・オブリージの精神

プロヒューモは、偽証した自分自身が許せなかったのである。「魔がさした」としか言いようのない偽証によって紳士としての名誉を失墜させてしまったことは、エリート教育を受けてきた彼にとって悔やんでも悔やみきれない痛恨事だったに違いない。金持ちの特権を利用して快適な余生を送る選択もあったはずだが、それを拒否し、あえて厳しい道を選んだ本当の理由は、「紳士道に反した自分を罰したかった」のではなかったかと私は推測している。

「ノブレス・オブリージ」という言葉がある。高い身分に伴う義務とあった意味の言葉である。高い地位にある者は、絶えず己れの身を正しく律し、いやしくも他人から後ろ指をさされるような行為は慎むべきであるという文脈で使われることが多い。英国のエリート教育では、この点を徹底的に教え込む。英国が紳士の国といわれるのも、この精神がいまなお健全に息づいているためだろう。プロヒューモの生き方に、真のエリート教育を見る思いがする。

トインビーホールでの下積み生活を何年かした後、彼はホールの財政基盤強化の仕事を引き受け、71年11月に「アトリー基金」をスタートさせた。この日、エリザベス女王がセンターを訪れ、プロヒューモを激励した。彼が人生のやり直しを始めてから8年の歳月が流れていた。

●女王陛下から騎士の称号

75年の年頭、彼は「大英帝国騎士」の称号を与えられた。イーストエンドでの長年の地道な社会奉仕活動が評価されたのである。デイリー・ミラー紙は、「赦された、女王陛下がプロヒューモの名誉を回復された」と大きく報道した。

95年、サッチャー元首相の誕生日の夕食会で彼は、エリザベス女王の隣に着席し、英国を代表する社会奉仕活動家としての地位を不動にした。私は、「名誉回復に人生を賭けたプロヒューモ」という記事をロンドン駐在の卒業論文にしたいと思っていた。だが、金融ビッグバンの取材に忙殺され、彼にインタビュする時間がなく、結局書かず仕舞いで帰国する羽目になり悔いが残った。

それから2年後、たまたまロンドンに出張したさい、わずかな時間だ

がプロヒューモに会うことができた。ロンドン・ストライプのワイシャツ（白地に紺の縞のあるワイシャツ）にグレーのダブルをきちつとまとい、英国紳士とはかくあるべしといった風情で現われた。すでに76歳、頭は禿げ上がり、残る髪にも白いものが目立つ。

柔和な表情で、「私のような過去の人間をどうして訪問しようとお思いになったのですか」と静かに問いかけられた。当時、リクルート事件が発生し、政治家や企業家の倫理観、責任感が問われていた。「あなたの責任の取り方を日本人に知ってもらいたいのです」と答えると、彼は黙ってうなずいた。

私が「日本の政治家に捧ぐ、女王陛下に赦された男、プロヒューモ――すさまじいケジメのつけ方」を執筆したのは、日経本紙ではなく、出版局が出していた日経ムック「フォーティ・ラブ」の誌上だった。

その日経ムックも廃刊されてすでに久しい。

みづはし ただひろ会員 1940年生れ 64年日本経済新聞入社 経済部記者 ブリッセル特派員 ロンドン支局長 日経ビジネス編集長 出版局次長 論説副主幹などを経て 2000年から千葉商科大学政策情報学部教授 専門は環境経済学 環境経営学など

マイBOOK マイPR

これでもいいのか、21世紀！

伊波新之助（朝日新聞出身）

混沌の現代を解明し対策を提起 21世紀を迎えて「これからは」と期待していたのに戦争は無くならず政治も経済も混沌を極めていく姿に素朴な正義感で立ち向かった1冊。

日本記者クラブでの記者会見の内容も各所にちりばめられており、新聞社や放送局が舞台になったインサイダー取引。一流企業の社長の「みんな謝ればこわくない」現象。追いつめられた子のリストカットや引きこもり。秋葉原事件の真相。金融危機や石油も。何でもかみ砕く記者精神横溢、警世の発信。

(TKC出版 1、680円)

不都合な生命 地球二億二千五百万年銀河の旅

チャールズ・S・コケル著

大蔵雄之助・訳（東京放送出身）

定説で説明できぬ生命の不思議 地球が太陽の回りを公転していることはどなたもご存じですが、太陽系自体が銀河を周回しているということ、私は知りませんでした。そういう点では翻訳は勉強になります。

われわれが意識しないこの惑星の

動きは地球の生物の生活環境に大きな影響があります。その中で微生物は20億年前に「発生」して以来ほとんど「進化」もせず、あるいは高圧に耐え、あるいは高熱を愛し、氷結すれば何万年でも冬眠状態で生き延びてきました。太陽はあと50億年で膨張爆発して死滅しますが、その際には微生物は他の銀河系に移住するらしいのです。その謎が今明らかに。

(麗澤大学出版会 2、310円)

雑誌よ、甦れ——「情報津波」時代のジャーナリズム

高橋文夫（日経BP社参事）

雑誌編集者や読者へのエール 雑誌がいま、危うい。「読売ウィークリー（旧週刊読売）」「論座」（朝日新聞社）『月刊現代』（講談社）——かつての花形誌・人気誌が相次いで休廃刊、雑誌全体の売り上げも、急坂を転げ落ちるように減る一方だ。雑誌がダメになれば、本もおかしくなる。活字文化そのものが形無しになってしまふ。雑誌を甦らせるすべはないのか。編集者や読者など、雑誌にかかわる人すべてに捧げる「エール」として、ウェブ時代の雑誌のあり方について書き下ろし。

(晶文社 1、680円)

「津和野」を生きる——四〇〇年の歴史と人びと——

羽原清雅（朝日新聞出身）

小藩から離れがたい人々の近現代 政治取材から解放され、先祖の墓を頼りに津和野藩の周辺にデータを求め、あちこちに寄り道をしつつ、10年かかりました。

ひそかに郷里に戻っていた？ 鵜外。創藩時のお家騒動。殿様を相手に横領容疑で告訴した旧藩士たち。大判小判を庭に隠して財力をつけ、左翼闘士を生んだ旧藩主家。伊能忠敬に先立ち北海道航路を探索した堀田仁助。仲間の才人を暗殺後出世した維新期の藩士たち。そんな話を掘り起こし、小藩のあがきと、中級士族の系譜を350ページにまとめました。埋もれた歴史を大いに楽しめました。

(文藝春秋社・自費出版 2、500円)

国際ブランドに押し上げる広告戦略

八巻俊雄（日本経済新聞出身）

広告の表現・媒体・効果測定 1987年から2000年まで、世界9カ国の「広告とマーケティング学会」で発表した15の論文をまとめた。発表はアメリカとカナダが7回、ヨーロッパが3回、アジアが5回である。

研究に取り上げた資料は50カ国余り。広告戦略の内容としては消費者問題、広告表現、広告媒体、広告の効果測定を中心としているが、1回だけ広告の歴史を取り上げた。2004年には中国で2回研究発表を行ったが、これは前者「コーポレート・コミュニケーション国際シンポジウム」（プラトール出版）で取り上げた。

(戎光祥出版 2、500円)

新聞・TVが消える日

猪熊建夫（毎日新聞出身）

メディアを浸食するネット テレビ、新聞、出版、音楽、ゲーム……などのコンテンツ産業は、ネットの攻勢に大きく揺さぶられている。音楽、ゲームはネットと親和性があるが、新聞、出版の紙メディアとTVは、ネットによってその存在がおよびやかされる状況になってきた。

折しも、世界的な大不況で広告収入が激変し、新聞・TV業界は赤字に転落しつつある。既存メディアは新たなビジネスモデルを構築できるのか。ジャーナリズムの将来はどうなるのか。こうした動きを俯瞰した概説書である。

(集英社新書 735円)

「写真回廊」の短文を担当します

今号から2年間、下記の4会員に「短文」を担当していただきます。「写真回廊」は会報の裏フロンティアなページです。新聞・通信各社の写真部記者の「この一枚」に、自由な発想でエッセーを添えていただきます。(執筆順)



▼石井 英夫 (いし い ひでお)

1955年産経新聞社入社。論説委員(コラムニスト)として、69年から2004年まで35年間一面コラム「産経抄」を執筆した。著書に『日本人の忘れもの』『蛙の遠めがね』『ぶらり中国』ほか「産経抄」を収録した本など。1988年度日本記者クラブ賞受賞、92年度菊池寛賞受賞。



▼柴崎 信三 (しばさき しんぞう)

1969年日本経済新聞社入社。社会部次長、文化部長、ウィークエンド編集長、編集委員、論説委員などを務め、2007年退社。現在、国民生活センター理事。著書に『魯迅の日本 漱石のイギリス「留学の世紀」を生きた人びと』など。



▼渡辺 みどり(わたなべ みどり)

1957年日本テレビ入社。報道局ディレクターとしてドキュメンタリーを制作、昭和天皇崩御報道ではチーフプロデューサーを務めた。現在、文化女子大学客員教授。著書に『西太后とフランス帰りの通訳』『美智子皇后の「いのちの旅」』『英国王室の女性学』など。



▼諏訪 正人 (すわ まさと)

1953年毎日新聞社入社。ブノンペン、ジュネーブ特派員、パリ支局長、東京本社学芸部長、論説委員。1979年から2002年まで朝刊一面コラム「余録」を執筆した。現在、毎日新聞特別顧問。著書に『余録』ほか諏訪正の筆名で『ジュヴェの肖像』、訳書にコクトー『円卓の騎士』など多数。1990年度日本記者クラブ賞受賞。

●会員インタビュー

R・ティシユキエヴィツチさん

駐日ポーランド大使館 二等書記官(政治・広報担当)

10年前ワルシャワ大学の学生とき、日本大使館主催の日本語弁論大会で優勝した。演題は「身ぶり、手ぶり」。ボディ・ランゲージの理解なしに異文化を理解することにはならないと思って選んだ、という。賞品はビデオカメラ。いまでも大切にしている、と。その弁論大会も30回



進出と関係がある。現在、トヨタ、東芝など自動車や家電関連の製造業を中心約250社が西欧市場への輸

を数え、ことしの1等賞は日本行きの往復航空券だったそう。ポーランドにはワルシャワ大学の他に2つの大学に日本語学科がある。日本語熱が高いのは、90年代以降の日本企業の

送に便利な南西部に進出し、2万人の雇用を生み出している。「ボクらのときは日本語ができれば引っぱりだこ。25人ほどのクラスメートのほとんどが日本企業に就職していた」。

ことしは、ワレサ登場で非社会主義政権が誕生して20年。日本との国交樹立90周年。シヨパン生誕200年。関連イベントが続く。発表会見などでクラブを大いに利用したい、と。33歳。3月から特別賛助会員。

(石川)

職員のAEDトレーニング



80歳以上の元気な会員が170人はいらっしゃるのではないだろうか。ビクターのなかにも、高齢者が多いので、すでにトイレに手すりをつけたりはしている▼ここでは現役戦士は時間と競争でニュースを追いつつ、ニュースソースとの「交易所」として施設を使う。一方、ここはかつての戦士が「休日」を憩うオアシスでもある▼万が一に備え、受付の職員は毎月AEDの練習をしている。先月は、BIで共にクリニックを開いている中澤会員と親友の中田医師にも参加してもらい、特訓を行った。虎ノ門病院の大森正樹さんがインストラクターだった。米国と日本のAED指導者資格を持つ専門家だ▼これまでの職員の成果をチェックしてもらった。評価は合格点だったが、一部修正を指摘された箇所もあった。来年は防災センターと一緒にやろうと思う。

(玄)

収支予算書

自 2009年4月1日
至 2010年3月31日

科 目	年 額	対前年度
I 事業活動収支の部		
1.事業活動収入		
会費収入	[358,189,000]	-11,493,000
(1)プレス会員会費	(304,249,000)	-8,427,000
法人会員会費	209,508,000	-4,243,000
個人A会員会費	25,210,000	-1,636,000
個人B会員会費	2,604,000	-111,000
個人C会員会費	8,323,000	-1,040,000
個人D会員会費	58,604,000	-1,397,000
(2)賛助会員会費	(53,940,000)	-3,066,000
法人賛助会員会費	42,372,000	-3,210,000
個人賛助会員会費	4,224,000	0
特別賛助会員会費	7,344,000	144,000
事業収入	[71,153,000]	-4,174,000
(1)貸室収入	42,835,000	-1,701,000
(2)飲食売上割戻金	20,969,000	-2,850,000
(3)施設機器賃貸収入	7,349,000	377,000
雑収入	[3,809,000]	1,654,000
(1)受取利息	3,337,000	1,532,000
(2)その他の雑収入	472,000	122,000
事業活動収入計	433,151,000	-14,013,000
2.事業活動支出		
事業費支出	[237,880,000]	-2,500,000
借室維持費	(176,011,000)	0
借 室 料	100,106,000	0
共 益 費	16,640,000	0
空 調・光 熱・水	9,265,000	0
ホール専用利用費	50,000,000	0
会 議 費	4,535,000	0
事業運営費	29,672,000	-2,000,000
会 報 発 行 費	16,800,000	-500,000
運 営 雑 費	1,542,000	0
通 信 費	4,500,000	0
印 刷 費	3,560,000	0
交 通 費	1,260,000	0
管理費支出	[191,577,000]	13,044,000
(1)人件費	(159,105,000)	13,044,000
給 与 金	93,279,000	9,665,000
賞 与・諸 手 当	63,826,000	3,379,000
厚 生 費	2,000,000	0
(2)その他の管理費	(32,472,000)	0
クラブ管理費	23,124,000	0
機 器 備 品 費	1,500,000	0
消 耗 品 費	3,500,000	0
事務委託費	3,436,000	0
事務雑費	912,000	0
事業活動支出計	429,457,000	10,544,000
事業活動収支差額	3,694,000	-24,557,000
II 特別会計活動収支の部		
1.特別会計活動収入		
特定資産取崩収入	8,000,000	8,000,000
特別積立預金取崩収入	8,000,000	
特別会計活動収入計	8,000,000	8,000,000
2.特別会計活動支出		
特定資産取得支出	8,000,000	-2,000,000
退職準備積立預金	0	-10,000,000
資産準備積立預金	0	0
40周年記念事業支出	8,000,000	8,000,000
特別会計活動支出計	8,000,000	-2,000,000
特別会計活動収支差額	0	10,000,000
III 予備費支出	3,694,000	-14,557,000

第73回総会 (3月23日 宴会場)

日本記者クラブ第73回総会(2008年度臨時総会)は、3月23日午後3時からクラブ宴会場で行われた。出席法人会員34社、委任法人会員102社、計136社の出席をもって成立(定足数72社)、滝鼻卓雄理事長を議長に議事を進めた。

2009年度事業計画および収支予算を理事会案通り可決した後、昨年5月の通常総会以降の役員の一部交代を承認した。

2009年度予算は、これまで通り実績を重視した収支均衡型で、規模は年額4億3,315万1,000円。08年度に比べ、1,401万3,000円減少(マイナス3.13%)。

今年は創立40周年なので特別会計で記念事業(記念パーティーの開催と『とおきの話6』の刊行)費用800万円を計上している。

2009年度日本記者クラブ賞推薦委員会

(3.5 大会議室)

専務理事が新委員の清本、黒岩、国分の各氏を紹介した後(小田新委員は欠席)、金指委員を委員長に互選。1月末までに推薦のあった5候補について審議。全候補者について意見を付して4月9日の選考委員会に報告することにした。

出席 金指委員長、田畑、清本、黒岩、国分の各委員。

第300回会報委員会

(3.11 小会議室)

3月号について意見交換した後、4月号の編集について協議した。

出席 住田委員長、竹居、見市、渡辺の各委員。

第96回総務委員会

(3.11 小会議室)

2009年度事業計画・同収支予算の原案と、

日本記者クラブ賞選考委員会と第19期役員選出委員会の構成案を承認し、理事会に上程した。

出席 朝比奈委員長、船橋、斎藤、神谷、島田、小櫃、鳥居、玉川の各委員、滝鼻理事長、宇治、今井の両副理事長、岩崎専務理事。

第467回理事会

(3.11 大会議室)

①2009年度事業計画・同収支予算案を総務委員会案通り承認し、第73回総会に上程することにした。

②毎日新聞論説副委員長の中井良則氏の事務局長就任を承認した(定款第17条2項「事務局長は理事会の承認を得て理事長が任免する」)。

③2009年度日本記者クラブ賞選考委員会を、クラブ賞内規に従い、総務委員会委員で構成することを決定した。

④第19期(2009・2010年度)役員選出委

会 員 異 動 (2008年4月～2009年3月)

月	会員 種別	プレス会員						法人・個人 賛助会員		特別 賛助 会員	全 会 員				
		法人	基本	個人 A	個人 B	個人 C	個人 D				名誉 功労	合 計		対前月増減	
		(社)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(社)	(人)	(人)	(社)	(人)	(社)	(人)
2008.4		145	803	471	74	152	941	9	71	179	75	216	2704	-1	-10
5		145	803	465	75	148	942	9	70	177	75	215	2694	-1	-10
6		145	803	464	76	146	941	9	70	178	75	215	2692	0	-2
7		145	801	465	76	148	943	9	70	177	77	215	2696	0	4
8		145	801	463	73	140	947	9	70	178	76	215	2687	0	-9
9		145	802	461	72	140	949	9	69	177	76	214	2686	-1	-1
10		145	803	458	73	140	945	9	69	177	75	214	2680	0	-6
11		144	801	458	71	138	940	9	69	175	76	213	2668	-1	-12
12		144	802	450	71	136	940	9	69	175	77	213	2660	0	-8
2009.1		144	802	452	71	137	935	9	68	174	77	212	2657	-1	-3
2		144	802	447	70	136	932	9	68	174	78	212	2648	0	-9
3		143	800	441	67	137	933	9	68	174	80	211	2641	-1	-7

φιλοσοφία

— T. gkawa

2009.3.09.

益川語録 ノーベル化学賞を受賞後、初めて帰国した下村脩さんが若い研究者に厳しい注文をつけたという記事が各紙に載っていた(3・24)。「リスクをと

ろうとせず、むずかしいことをやろうとする元気がない」▼昨年、受賞した日本人4人の発言は、右顧左眈せずそれぞれの仕方端的に本質を突いていて爽快だった。特に益川敏英さんは庶民的でサービス精神もあるので、テレビはじめメディアにモテモテだった。お忙しいなかお付き合いただいたことへの感謝の気持ちもこめ

ての昼食会(3・9)だった▼益川さんにはちゃめちゃんエネルギーにみちた、若い日の研究者時代を語った。そしてゲストブックにはギリシャ語でフィロソフィア(愛される知)と書いた。速記録を作成中だが、ここでは語録を一つだけ紹介する。サブプライムでノトラアスになった金融工学だが、さらっとこんな風に▼「そうむずかしいものじゃない。原理的には簡単な拡散方程式を解いているだけ。パラメーターがたくさんあるので、コンピュータでないとできないけど。ある一定の条件では使えるが、状況が変わるような政治的な出来事があれば、そこに表れてくるパラメーターが変わるので、合うはずがない。」(左)

第379回会員資格委員会
(3・18 シルバールーム)
4月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。
出席 斎藤委員長、布施、大橋、坂本、若松、川嶋、工藤の各委員。

第385回企画委員会
(3・18 10階Bホール)
司会を担当した委員がクラブ行事を報告した後、今後のゲスト候補や企画などについて協議した。
出席 船橋委員長、倉重、高畑、宮田(二)、長谷川、菅沼、会田、田崎、影山、川戸、井田、和田、川村、石郷岡、高橋、長沢の各委員。
第181回施設運営委員会
(3・18 小会議室)
1月、2月のアラスカ売り上げと貸室利用状況について、事務局が報告した。
出席 神谷委員長、高橋、畑野、鈴木、渡部の各委員。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■ポーランド農相 記者会見

マレック・サビツキ農相が会見し、EU第3位の生産量と豊富な生産品目を持つ農業国として、日本への輸出拡大に力を入れていることを説明した。照会先:ポーランド大使館 <http://www.tokio.polemb.net/> (3. 3 大会議室)

■講演「金融危機後のコーポレート・ガバナンス」

OECDのフィアナ・ジェソヴァ・シニアポリシーマネジャーが講演した。主催=OECD東京センター <http://www.oecd-tokyo.org/> (3. 4 宴会場)

■勝間和代氏講演「売る立場としての『読書進化論』」

日本ABC協会(成田豊会長 <http://www.jabc.or.jp/>)のフォーラムで、経済評論家・公認会計士の勝間和代氏が出版物の事前マーケティング、事後フォローアップのあり方について話した。(3. 5 10Fホール)

■シンポジウム「死刑-作家の視点、言論の責任-」

日本ペンクラブ(阿刀田高会長 <http://www.japanpen.or.jp/>)が死刑制度を考えるシンポジウムを開いた。瀬戸内寂聴氏の講演「作家の視点」の後、「言論の責任」をテーマに、森達也氏、篠田博之氏、川村湊氏、山田健太氏(司会)がパネルディスカッションを行った。(3. 5 10Fホール)

■南アフリカ映画「IZULU LAMI-My Secret Sky」上映会

南ア大使館が上映会とレセプションを開いた。作品は、母を亡くしたズールー族の姉弟の物語で、辺境の大自然やダーバンの都市部で暮らす人々の様子も描かれる。レセプションにはングバネ大使も出席した。作品HP: <http://www.mysecretsky.com/> *問い合わせは大使館 03-3265-3366へ。(3. 9 10Fホール)

■「海のエジプト展」記者発表

エジプト・アレクサンドリア沖海底からの発掘品を紹介する「海のエジプト展」(6/27~9/23パシフィコ横浜 主催:朝日新聞社、TBS、「海のエジプト展」実行委員会 HP: <http://www.asahi.com/egypt/>)の概要が発表された。横浜開港150周年記念事業の一環として行われる。(3. 10 10Fホール)

■全国郷土紙連合創立35周年記念パーティー

全国11社からなる全国郷土紙連合(常陽新聞新社、長野日報社、釧路新聞社、北羽新報社、荘内日報社、東愛知新聞社、紀伊民報社、宇部日報社、南海日日新聞社、宮古毎日新聞、八重山毎日新聞:会長=佐久秀幸長野日報社長 <http://www.kyodoshi.com/>)が創立35周年を祝った。(3. 12 10Fホール)

■杉田日経会長講演

未来をひらく日本委員会(尾畑雅美会長 <http://www.nihoniinkai.com/>)で、日本経済新聞の杉田亮毅会長が「米・中新時代」と日本の選択」と題して講演した。(3. 12 10Fホール)

■放送ウーマン賞2008贈賞式

日本女性放送者懇談会(大輪香菊会長 <http://sjwrt.org/>)が贈賞式を行った。1973年から行われている賞で、今年はフジテレビのドラマ演出家・宮本理江子さん、毎日放送アナウンサーの水野晶子さんに贈られた。(3. 13 10Fホール)

■「熟年世代を生きる一心のアンチエイジング」

美肌師の佐伯チズ氏、染谷淑子・東京女子大教授、作家の小林照幸氏が後半生の生き方について語り合った。読売・中公文女性フォーラム21主催。(3. 14 10Fホール)

■文化講座「平城遷都と藤原氏」

奈良文化財研究所の窪寺茂氏が平城京跡大極殿正殿の復元工事について解説、その後上田正昭・京大名誉教授

新しいOB会員

の講演「平城京と藤原氏」が行われた。主催は奈良新聞社。(3. 21 10Fホール)

■「内」sBAR〜風とロックと新聞広告?」

クリエイティブディレクターの箭内道彦氏と岡康道氏が、媒体としての新聞広告の魅力について対談した。新聞協会が広告会社のプランナー、クリエイターを対象に開いた。(3. 24 レストラン・アラスカ)

■「がんばれ先生!東京新聞教育賞」表彰式

都内の学校などですぐれた教育を実践している教師を顕彰するもの。原宿で蚕を育てることで生命のサイクルを教えた幼稚園の先生など10人が表彰された。小出宣昭・東京新聞代表から賞状、副賞が贈られた後、都立瑞穂農芸高校の村田千春教諭が受賞者を代表してあいさつした。(3. 25 10Fホール)

■鳥越俊太郎氏ががん患者団体支援機構理事長に

08年11月に亡くなった俵萌子・前理事長の後任に鳥越俊太郎さんが就任したことを発表した。同機構は全国に数多くあるがん患者会の互助、連携の支援を目的に05年に設立された(HP <http://www.canps.net/>)。会見後に、俵さんを偲び、最後の著書『人生、捨てたもんやない』(海竜社)出版を記念する会が行われ、鳥越さんや自身も乳がん摘出手術を受けたタレントの山田邦子さんも出席した。(3. 27 小会議室、10Fホール)

■温泉とスポーツで健康増進

ジョギングや足湯、温浴を組み合わせ、健康増進を図るスポーツ「スパトライアスロン」大会(<http://www.spatra.jp/>)の2009年4~7月期間開催概要が発表された。各開催地の代表者やタレントのジャガー横田さんらゲストランナーも出席した。(3. 30 宴会場)

■放送人政治懇話会

次のようにゲストを招いた。高市早苗・経産副大臣(3. 4)、谷津義男・自民党総合農政調査会長(3. 11)、小川勝也・民主党参院議員(3. 18)、津島雄二・自民党税調会長(3. 25)

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

**吉富
カクテル**

ウエスタン・ローズは春の香り
今月のカクテルは春風のようなカクテル「ウエスタン・ローズ」です。アプリコット・ブランデーの甘酸っぱい香りとベルモット風味に、レモンジュースがキリッとした輪郭を作り出します。

**和食****卯月懷石膳**

この季節ならではの食材をたっぷり盛り込んだ「卯月懷石膳」です。(青木尚篤)
◆突き出し・子持ち若芽浸し、前菜・身巻き海老、蛸桜煮はか、桜・ズワイ蟹ヨモギ巻き すまし仕立て、刺身・鯛など3点若菜盛り、焼き物・鮭ステーキ、煮物・春野菜盛り合わせ、揚げ物・アイナメ唐草揚げ、食事・茶そば、水菓子・季節の果物 (5,250円 5月1日まで)

洋食**3種の肉のグリルコース**

4月の企画メニューは、牛ヒレ、子羊、豚ロースの3種の肉のグリルを盛り合わせた「ミックスグリルコース」です。ランチタイムも提供します。(シェフ：黒須修一)

◆コンソメスープ ミックスグリル グリーンアスパラサラダ パイナップル コーヒーまたは紅茶 パン (2,980円 5月1日まで)

歓送迎会プラン まだ間に合います

5月2日まで、歓送迎会用のお得なパーティープランをご用意しています。お一人3,500円で部屋代、飲物代は別です。お酒の持ち込みは無料です。

◆冷たい料理：真鯛のカルパッチョ、ツブ貝のガーリック風味マリネなど4品、温かい料理：豚肉ロース肉のソテー、桜エビと春野菜のスパゲティーなど4品、和食：小鉢、寿司、そば

寄贈書

関西テレビ放送50年史 関西テレビ放送
第49回2008年報道写真展 記念写真集 東京写真記者協会
源流 第15号 加藤好雄会員
中国に生きた外国人 不思議ホテル北京友誼賓館
小池晴子氏

招待券

カルティエ クリエイション めぐり逢う美の記憶
日本経済新聞社

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	ホームページアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委 員=石田昭彦 上村幸治 國府一郎 竹居照芳
枇杷田裕 見市 元 村澤繁夫 渡辺みどり

連 絡=長谷川和子 本庄五月

(電 話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

戦後オキナワ あの日・あの時**「あんやたん」写真展 新聞博物館**

沖縄タイムス主催の写真展が5月10日(日)まで新聞博物館(横浜市中区)で開催されています。沖縄戦から米軍支配、そして本土復帰まで、厳しい時代を生きた沖縄県民の姿を紹介しています。「あんやたん」とは「あんなだった」という意味の沖縄の言葉です。

<訃報>

平田真巳会員(個人D・共同通信OB)が3月25日、腎不全のため死去されました。謹んでお悔やみ申しあげます。平田さんは1975年~85年と1987年~89年の2回、企画委員を務め多くの経済関係の会見・研究会で司会を担当されました。

<法人会員代表変更>

北海道放送 新 渡辺 卓 代表取締役社長

旧 長沼 修

信越放送 新 中島克彦 常務取締役情報センター長

旧 田幸淳男

<会員現況> 法人会員 143社 基本会員 786人

個人会員 1,566人 法人・個人賛助会員 68社 173人

特別賛助会員 81人 名誉・功労会員 9人

計 211社 2,615人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>**「会見速記録」：3月の新規掲載**

●門間一夫日銀調査統計局長「日本経済の現状と展望」(09.2.9) ●田中均日本国際交流センターシニアフェロー「外交政策の『茎』を太くしたい」(09.2.13) ●足立正彦住友商事総合研究所北米担当シニア・アナリスト「オバマ政権の構造と政策展望」(09.2.20) ●パスカル・ラミーWTO事務局長記者会見(09.2.25) ●高梨昌元雇用審議会会長「派遣法の原点に返れ」(09.3.2)

今後の行事予定 (4/3現在)

4.17(金) 11:30~13:00 (10階ホール)

浜田純一 東京大学新総長昼食会

15:30~16:00 (10階ホール)

シリーズ研究会「雇用問題」⑤本原仁志 日本人材派遣協会理事長

4.20(月) 16:00~17:30 (10階ホール)

シリーズ研究会「検察と政治」③ 宗像紀夫 元東京地検特捜部長

4.22(水) 14:30~15:30 (10階ホール)

著者と語る『政治家失格』田崎史郎 時事通信社解説委員長

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテーブルでお知らせしています。

写真回廊

撮影

加藤

学

(かとう・まなぶ
読売新聞中部支社写真課)



雨の中震えるヒゲペンギンのヒナⅡ2・9 南極バリエントス島

泥まみれのペンちゃん

「おう、ペンちゃん、油まみれじゃないか。かわいそうに。いよいよ南極にも重油汚染が押し寄せてきたのか。深刻な事態だなあ」思わず声にだしたくなるような写真だ。

たしかに南極半島に生息するヒゲペンギンのひなの写真だが、これは湾岸戦争の海鳥のような重油まみれ（一部に虚報説もあった）なのではない。南極の急速な温暖化で、雨の中、泥まみれになったペンギンであるそう。しかしこれはこれで、別の意味で深刻な事態であることに変わりない。

南極半島の年平均気温は60年で3度上がっており、ヒゲペンギンの数は過去30年で半減したという。この写真をとった読売新聞のカメラマン氏が訪れたバリエントス島の2009年2月の気温はなんと14度。防寒服の体に汗がにじんだそう。

南極の海水の底はオキアミが食べる藻の宝庫だが、氷の減少で藻が減り、藻を食べるオキアミが減ってペンギンが生きにくくなる——なるほど納得がいく因果話ではないか。

ペンギンの名の由来は、ラテン語やスペイン語の「太っちょ」だそうで、ペンギンがずんぐりのメタボであるのは当然だが、それが泥まみれでスリム化している。地球への重大な警告でなくて何であるか。

(石井 英夫)